

地域に眠る偉人を発掘

○：「なぜ日本の近代化を担った人たちの思想が国民主権から国家主権へと変貌していったのか」と問い続けて半世紀。この謎を解

人物風土記



●自由民権結社の湘南社を研究し「鈴木房五郎」の論文を平塚市博物館に寄稿した

岩崎 稔さん

河内在住 74歳

に眠る偉人を掘り起こす。た「或る戦いの軌跡」を出版

○：3歳で母を亡くし、厚木市戸田村の「うなぎや」を屋号にもつ祖母や叔父、叔母の家で育てられた。熱中しやすい性格で、大磯海岸でヤドカリ獲りに夢中になり須賀まで歩いて帰ったことも。大正大学では西洋哲学を専攻し、物事の根源を問う姿勢を身に付けたが「学問は生涯にわたってやるもの」と中退。金属加工会社や福祉施設などの職を転々としながら、亡き母への追慕と親戚への感謝の念から、戸田村の地域史を調査するようになった。

○：「あの時は『時間が無い』が口癖だった」と、真っ直ぐ仕事場から帰宅すると15分で風呂と食事を済ませ、深夜まで机にかじりつく日々。日中戦争で死んだ親戚の陣中手紙をまとめ

た「或る戦いの軌跡」を出版。南京事件を記した資料としてさまざまな著書に引用される。自らの一族と故郷の民俗を描いた『うなぎやの歴史』では、21人に聞き取りを行い一人称視点でユーモアに書き出した。研究一辺倒の父の背を見て育った二人の息子は独立して現在、妻と二人暮らし。「家の事はほとんどやらずに没頭できたのは家族支えがあったから」と頭を下げる。○：「堀江弥八」「長峰浅吉」「後藤潤」など湘南社には名前は判明していても、その生涯や思想が不明な者がまだ大勢いる。今年150周年。改憲論議が活性化される中で「自由な発想で憲法を考えたい」と、衰え知らずの研究意欲が一際燃え盛る。